



私が思う、
北区の魅力・好きな場所

「エルムトンネル」の上の木陰をジョギングしたり、北大の獣医学部が飼育する動物たちを見たり、都市の真ん中に豊かな自然がたくさん残っていることが、とてもうれしいです。また複数の大学がある文教地区で、若者や市外からの人の出入りもあり、いつも新しい風を感じられる地域だと思います。

日本プライマリ・ケア連合学会認定
家庭医療専門医・指導医 ^{おおくぼ} 大久保 彩織 さん

北見市留辺薬町出身。2008年札幌医科大学医学部医学科卒。
二児の母。

一般的にお医者さんと同じ合うのは、自分や家族の病気を疑い、病院を受診した時などに限られています。「医療は病院受診から」。そんなイメージを持つ人も少なくはないはず。「医療や健康の問題は、病院で待つだけでなく、手が届かない部分も多く、もっと病院の外に出てケアができれば」という思いはずっとありました。薬では治療ができない病を抱えている人もいますし、地域にそっくりな人たちの安心につながる場所があったらいいなと思ったのが、今の活動につながっています。そう話すのは家庭医の大久保さんです。

出張・暮らしの保健室
開催日程は下記ホームページで確認を。
<http://www.mintaru.com/>
(フェアトレード雑貨&レストラン「みんたる」)

※ストレスや孤立などを感じている人に対して、医師が薬の代わりにその人の好きなことや特技を生かして役割が生まれるようなコミュニティの資源を紹介することで、生きがいや社会参加の機会を持ってもらう方法のこと。



大久保さんが非常勤で勤務する「ファミリークリニックさっぽろ山鼻」で行われている家庭医カンファレンスの様子
「出張・暮らしの保健室」での出会いを通して医療機関や他職種とのコーディネートなどを行う役割も担っています



暮らしの中に医療とつながる場所を。
ルールも時間の制限もなく、ただ地域の人たちの
声に耳を傾けるために、会いに行く。

CASE.01

Town planning
in North

出張・暮らしの保健室

つなぐ

人や地域をつなぐ「いま」の世代

まちの病院やクリニックには「内科」「外科」「小児科」などの診療科目が掲げられているところがほとんどです。家庭医療専門医（以下家庭医）とは、このような臓器別や年齢などの区切りではなく、よくある疾患に優先順位をつけ、その人や家族の背景も含めて診療する医師のこと。家庭医の資格を持つ医師は全国にわずか1000人余りと少ない一方、高齢化が進み、複数の疾患を持つ患者が増える中、家庭医の存在はますます重要になりつつあります。例えば要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けることができるように地域内で助け合う「地域包括ケアシステム」の体制づくりにおいても、家庭医が担う役割は大きいといわれています。

区内のカフェで不定期に開催している「出張・暮らしの保健室」には、待つだけでなく、自ら地域に出ることで「患者になる前の地域の人々とともにいたい」と奔走する、家庭医の姿がありました。